

## 国際円座 訳語問題から近世社会を掘り下げる

塚田 孝, ティモシー・エイモス, ジョン・ポーター

### ◆要 旨

本国際円座（シンポジウム）は、2011年7月30日（土）の13:00～17:00に大阪市立大学第4会議室（経済学部棟2F）において、近世大坂研究会・都市問題研究（課題名「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」）・GCOE都市論ユニットの共催で開催された。近世大坂研究会と都市問題研究の代表者である塚田孝による趣旨説明ののち、ダニエル・ボツマン氏（イェール大学）、ティモシー・エイモス氏（シンガポール国立大学）、ジョン・ポーター氏（都市研究プラザ特別研究員）の問題提起を受け、佐賀朝（文学研究科）の司会によって質疑・討論が行われた。

この円座には、海外の研究者10人余を含む40人以上の参加者を得たが、各問題提起に触発され、多様な角度から活発な議論が交わされ、大きな成果が得られた。そこで、その一部を特別寄稿として本誌に掲載することとなった。

円座では、まず塚田から、日本近世史の分野で近年進展しつつある比較類型史の方法的視点をふまえて、日本語を母語としない日本近世史研究者が日々直面している翻訳・訳語問題から、日本近世社会の特質をあぶり出すという本円座の趣旨を説明した。エイモス氏は、学問としての翻訳を否定する近年の欧米研究者の議論を批判的に検討した上で、一貫性と実用性を重視する「学問としての翻訳」を実践していく立場から、日本近世史の英訳が抱える課題を整理し、日本近世史研究が生み出した方法的概念の英訳の必要性にも言及した。ポーター氏は、塚田『都市大坂と非人』の翻訳経験をふまえて、近世大坂における非人の存在形態とその変化を深く理解し、正確で豊かな英訳を実践するための課題を提示するとともに、日本の近世社会が持つ、所有や身分集団の特質を欧米研究者の視点から鋭くえぐりだしている。

なお、ボツマン氏の報告については、諸般の事情から掲載できなかったが、その要点は、本誌掲載の塚田の趣旨説明において紹介しているので、参照されたい。

今回の国際円座の諸報告を本誌に掲載していただくにあたり、ご協力いただいた各位に感謝したい。

（塚田 孝・佐賀 朝）

### 趣旨説明

## 比較史の発展に向けて

—— 訳語問題から近世社会を掘り下げる ——

塚 田 孝

### はじめに

今回の国際円座を企画した近世大坂研究会は、近世大坂の都市社会史研究を進めるため組織したもののだが、現

在、科研費による共同研究「近世大坂の『法と社会』—身分的周縁の比較類型論に向けて—」（基盤研究（B））を推進する基盤をなしている。この共同研究の第1の研究目的は、〈法と社会〉という分析視角から、近世大坂

を主な対象として、多様に展開する周縁的な社会諸集団の存立構造〈身分的周縁〉を解明することにあるが、もう一つの目的として「近世都市の身分的周縁を把握する分析方法を開発し、日本国内はもちろん、大規模な都市を発展させたアジア・ヨーロッパの近世身分社会の〈比較類型史〉へとつなげていくこと」を考えている。海外における研究を踏まえた海外諸都市の比較(類型)史を進めるためには、日本史の翻訳が不可欠となることは言うまでもないであろう。

また都市問題研究(課題名「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」)は、歴史に関心を持つ学生や歴史博物館を利用する市民を主な対象として、都市大坂に関する基本史料の丁寧な解説から、その歴史像を理解しうるテキストを開発することを目的としているが、この成果をもとに英語版のテキストを作成し、海外からの博物館来館者の利用に供したり、海外の大学などでの日本史教育にも活用してもらえないかと考えている。ここでは、日本史の翻訳はより直接的な課題となろう。

なお、GCOE 都市論ユニットの活動の一環として、CCS (City Culture and Society) において大阪の都市史の特集が予定されている。ここでも、日本史の翻訳が不可欠である。

私に関わるこれらの諸研究活動において、何れも翻訳(訳語)問題が重要な意味を持ってきたことから、国際円座「訳語問題から近世社会を掘り下げる」を企画するに至ったのである。ただ、あれこれの歴史事象にどういった訳語が適切かということに限定した議論をすることは想定していない。あくまでそれを通して近世社会の実態を「掘り下げる」ことを目的にしているが、そのこの意味は後述しよう。

## 1. 比較史の模索

「比較(類型)史」は、訳語問題と深く関わる。近世大坂研究会の課題とする「身分的周縁の比較類型論」について、都市史研究において持つ意味を今少し説明しておこう。

日本列島においては、近世になって都市が巨大化を遂げる。とくに、江戸・京都・大坂は人口数十万から百万におよぶ巨大都市となった。こうした巨大都市では生活・生産・流通・文化・芸能・宗教などに関わる人びとが、社会的分業をとめないながら、周縁的な社会集団を多様に展開させ、その社会構造は農村地域とは比べものにならない複雑なものになった。民衆的視座から都市の存立構造を把握するためには、これらの周縁的な社会集団の存在形態の解明が不可欠である<sup>1)</sup>。

都市の巨大化によって周縁的な社会集団の生成が必然化

されるとするならば、周縁的な社会集団が複層する現象は、日本列島内はもちろん諸外国の大都市にも共通すると見ることができよう。その一方で、それら諸集団がどのような結合形態・関係構造をとるかは、都市とそれを包み込む地域社会が培ってきた固有な歴史的蓄積(その表現形態としての都市全体の社会・文化構造)に規定され、多様であろう。ここに、周縁的な社会諸集団の比較類型史が求められる根拠がある。

こうした立場から、近世大坂の周縁的な社会集団を対象に研究を進め、比較のための基準作りと分析方法(「法と社会」)の開発を進め、その上に立った日本・アジア・欧米などを含む世界的な比較都市類型史の共同研究を夢みているのである。

こうした比較(類型)史の模索は、吉田伸之氏の提言に学ぶところが大きい。吉田氏は、日本近世の都市とフランス近世の都市に関する共同研究にあたって、都市史の研究方向として共通する視角を見出している(吉田伸之「伝統都市の比較類型把握」高澤紀恵、吉田伸之、アラン・ティレ編『パリと江戸—伝統都市の比較史へ—』山川出版社、2009)。その視角とは、

- i 「細部と深層へ」とでもいうべき研究の指向性(「表象や表層からではなく」)
- ii 「国家よりは社会に、権力よりは民衆に、中心よりは周縁に、研究の視座を据える傾向を有し、そうした視座から全体を見据えよう」
- iii 「新自由主義の跋扈する世界史の現在において」「共質」の「研究主体における存在被拘束性」/「生活者としての営み自体が、相互の視座における親和性の基盤」

があることを、指摘している。

ここに示された「伝統都市の比較類型把握」の可能性とその根拠は、民衆の生活世界に寄り添いながら、周縁的な社会集団の多様な展開と都市社会の全体構造を把握する営みの重要性を示すものであり、すでにその一定の蓄積が存在することも我々を勇気づけてくれるのである。

2010年8月に長野県飯田市で開催された日仏比較都市史の国際円座の成果を中心に取りまとめられた『伝統都市を比較する』(高澤紀恵、吉田伸之、フランソワ＝ジョセフ・ルッジウ、ギョーム・カレ編、山川出版社、2011年)が刊行された。そこに収録された総論「小規模伝統都市—飯田とシャルルヴィル—」において、吉田氏は改めて“比較類型把握は果たして可能なのか、どのような意義を持つのかについていろいろ考えさせられた”として、比較史の成立する根拠、ないし意義について以下の3点を指摘している。第1には「所有論の見地」であり、第2には「16~18世紀の「世界史」、第3には

「現代都市と伝統都市」である。

第2点目の「16～18世紀の「世界史」」は、フランスと日本という異なる国制は直接接することはなかったが、16世紀に起動する地球的世界の成立する時代の同時代性、「地球全体に及ぶ新たな歴史の波動に対する、西と東の、異なる同時代的な対応」(4頁)としてみようということである。なお、この16世紀の地球的世界の成立は、グローバル化した現代に直結するものではなく、19世紀以降の資本主義の地球規模化とは区別される。

第3点目の「現代都市と伝統都市」は、多様で個性的な伝統都市が、近代都市を経て、均質で非個性的な現代都市に取って代わられるが、ヨーロッパにおいては「伝統は現代の市民社会へと「肯定的に」継承されている」(4頁)のに対して、アジアを含む非ヨーロッパ世界においては「伝統都市はアイデアの面で、また都市インフラの点でも、資本主義システムによって「踏みしだかれる」形で、「否定的」に継承されていく」(5頁)という歴史的対比によって現代世界の理解に示唆が与えられるということである。

第1の「所有論の見地」が、先の伝統都市の「比較類型把握」に直接関わっている。長文であるが、この部分を引用しよう。

「ここでいう比較類型把握とは、欧米起源の資本主義的な生産様式が、自己の姿に似せて、地球規模で世界を「変革」する以前の諸社会構成において、その基盤にある前近代の生産様式が、相互に直接的な交流がなく、それぞれ個性的に育まれたものであっても、対象となる生産の手段への関係のありよう、すなわち所有において、相互に共質性を有するか否かという問題に帰着するのではないか、ということである。この点を、とりあえずは封建的社会構成と目される社会構造を形成した社会について考えてみよう。封建的社会構成を規定する所有(封建的所有)のありようは、まず第一に、大地にたいする関係行為としての(領主の)大土地所有と、これと即自的に結合する(農奴の)小土地所有(保有)、および、第二に、手工業経営にみられる用具への関係行為(用具所有)という、二つの主要な形態からなる。これに、通時代的に存在する商人的所有(貨幣・動産的所有)と、その対極を形成する労働力能所有、またその亜種・被疎外態としての乞食・勸進所有などが、副次的な所有形態として措定される。17～19世紀の飯田とシャルルヴィルのように、「共通の起源に遡り得ない」小規模な都市社会とその周辺を素材として取り上げる場合であっても、こうした所有の諸形態を実態レベルにおいて一つ一つみること、その本質的な点で同一な性格を持つか否かを丁寧に検討することが重要となる。たとえば、両者に見ら

れる大工のような職人において、その用具への関係の仕方、用具所有を支える同職的な結合の性格、親方と徒弟との関係、製品の商品化や販売の特質、領主権力による拘束などについて、逐一比較検討することから、用具所有としての共通性(一般性)と、差異性(歴史的な個性)とを同時に見いだすことが可能となるだろう。そしてこうした比較のレベルは、ふつうの人々の位相において、よりいっそう意味を増すのではないだろうか。」(3—4頁)

ここには、直接的な影響関係のない歴史的地域社会であっても、本質的なレベルでの共通性と差異性(歴史的な個性)を見出すことができる根拠が示されている。巨大都市における多様な社会諸集団の展開という共通する状況とその歴史的個性のあり様の基盤にも、こうした所有の特質があるということではなからうか。

## 2. 翻訳・訳語問題と比較史

翻訳・訳語問題は、日本語の論考を翻訳するという狭い局面に限定されない。日本語を母語としない日本史研究者が自らの研究を行う際に常に直面している問題である。そして、それは比較史と密接に結びついていることに気付かせてくれたのが、先の『伝統都市を比較する』に収録されたギョーム・カレ氏の論考「飯田とシャルルヴィルを比較する一問題、提案、展望」であった。カレ氏は、アンシアン・レジーム期のフランスと徳川時代の日本のように、直接的な関係が皆無であった社会を比較することの意味や利点を述べた文脈の中で、次のように述べている。

「私の場合は少し特別かもしれないが、単純だが決定的とも言える最初の理由は、自分が歴史家として二つの教育を受けてきたことにある。私は日本史に取りかかる前にフランス史と西洋史を勉強したため、二つの文化でつくられてきた諸概念が自分の中で共存しているのである。そして実際、アンシアン・レジーム期のフランスよりも徳川時代の日本の実態の方に詳しくなっても、翻訳や概念形成などの知的操作をおこなうさい、機械的に、またときに無意識のうちに比較史的考察に駆り立てられてしまう。だが理解可能なものに置き替えるという、ただそれだけで衝動的に比較へと導かれるのは、私の個人的なケースを超えて、最初の教育で接触しなかった外国の歴史に関心をもつすべての人々に宿っているようである。」(p184)

カレ氏は、加賀藩の銀座や御用商人などの研究の専門家であるが、日本語以外の言語を母語とする人が日本史研究を行うようになった場合、「翻訳や概念形成などの

知的操作をおこなうさい、機械的に、またときに無意識のうちに比較史的考察に駆り立てられ」というのは、多かれ少なかれ共通のことであろう。しかも、それは翻訳に限らず、自らの研究を母語で記述しようとする際には常に付きまとうものである。こうした比較史的思考が、もたらす効用について、カレ氏は次のように指摘する。

「比較史という弁証法的な実践の効用は、研究者にとっては自明の対象が、総体としての歴史学の伝統や文化的伝統による構築物だと改めて思い起こさせることで、まさに対象に対する慣れ親しみを抜き去ることであらねばならない。したがって比較史とは、単にある事柄を確認したり、差異を探したり、さらに交流を跡づけたりすることではなく、歴史学の方法そのものの批判に努めることなのである。歴史学の方法をこのように批判することで、歴史家は研究の枠組みとなっている図式の相対性に注意を喚起される。」(p 185)

これは、日本語を母語とする者が、あまりに自然すぎて気づかないことが、翻訳しようのない事象・概念の困難さに直面して、改めてそのことを持つ意味に気づかされるという問題を指摘しているのではないだろうか。この点を意識して、この国際円座の案内に次のように書いたのである。

「日本近世史関係の論考を英訳しようとする、たちまち「町」や「非人」などの基本的な事象をどう訳せばよいかという困難にぶつかる。さらに様々な地位や役職を「株」として定立(権利化)する」近世社会の特質を訳そうとすると、「株」・「権利化」などの概念を正確に伝えることの困難を自覚せざるを得ない。このような困難の陰には欧米と日本の近世社会の構造的な差異が潜んでいるのではないか。このような問題意識から、訳語問題を手掛かりとして、日本近世の身分社会の特質を探ってみようというのが、本円座のねらいである。

英語圏で日本史研究を行っている研究者から、こうした問題の具体的事例を紹介してもらいながら、みんなで議論する場を共有することで課題の前進を図りたい。」

ここに記したように、本円座の目的は、ある事象・ある用語に適切な訳語を探そうということだけではない。その翻訳の困難さのなかに、それぞれの歴史的な社会における構造的な差異を見出し(比較史的思考)、そのことを自覚することで日本近世の身分社会の特質をさらに掘り下げて考えてみることを目的としているのである。

こうした企画の意図を実現するべく、次の3人の研究者に問題提起をお願いした。

ダニエル・ボツマン氏(イエール大学)

「訳語問題から近世社会を掘り下げる」<sup>2)</sup>

ティモシー・エイモス氏(シンガポール国立大学)

「日本近世史と翻訳」

ジョン・ポーター氏(大阪市立大学都市研究プラザ)

「近世大坂の非人史における訳語問題」

今回の国際円座で問題提起を依頼するにあたっては、これまでのいくつかの経験が踏まえられている。ボツマン氏とは、吉田伸之氏を中心とする「ぐるーぶ・とらっど3」の共同研究の一環として、日本近世都市史のいくつかの論文を英語で発表することをめざした翻訳プロジェクトとともに議論する機会があり、その困難さを教えてもらったところである。また、エイモス氏が同僚と一緒に組織され、2009年9月にシンガポール大学で開催されたワークショップ「近世日本における死と終焉」に私も参加させてもらったが、そのワークショップの成果取りまとめで、幾多の困難にぶつかる状況をエイモス氏と一緒に体験させてもらった(私は事情を聞いているだけだったが)。さらに、今年(2011年)3月31日~4月3日に開催されたAAS(Association for Asian Studies [アジア研究学会])大会でエイモス氏、ポーター氏、マールン・エーラス氏(ノースカロライナ大シャーロット校)と私の4人で組んだパネルの準備の過程で訳語問題の難しさを痛感させられた。この時には、ポーター氏には本当にお世話になった。これらの経験が、今回の国際円座を企画する直接の前提を成している。その意味で、今回はこれまでの議論を共有し、踏まえながら、前進しようとするものであり、最適の問題提起者を得たものと考えている。

## おわりに

最後に、最近よく耳にする「国際的発信」に関わって、若干の補足をしておきたい。近年、とかく「国際的発信」と称して、英語で発表・刊行することが求められている。先にこれまでに取り組んだ共同作業に触れたように、私も比較史や海外の研究者との共同討論が重要だと考えている。しかし、ここまで述べてきたような困難な問題が伏在していることを抜きにして、ともかく英語で発表することを求めることには疑問を感じず。

その際にしばしば耳にするのが、特に英語で書かれた論文は、英語の思考法があり、それに合わせた論理立てをすることが必要だ、そうでなければ海外の雑誌などに掲載されないし、読んでももらえないというようなことである。こうした思考法の違いを自覚することによって、自らの研究を対自化して深める契機になれば、その意味がないとは言えない。しかし、日本史の史料やその利用法、そこから生まれる論理の独自性などを、英語にはたらく論理に合わせてしまうことで、英語圏の研究者にそ

のような「比較史の効用」が生まれないとしたら、それは本当の意味での「国際的発信」と言えるのだろうか。それは国際化なのか、従属化ではないのか、とも言い換えることができるであろう。

海外の日本史研究者が、自らの研究において常に訳語問題に直面しているとしたら、そうした人々との今回のような議論を繰り返しながら、その上に立ってそうした人たちの媒介を得て、日本史以外の海外の研究者とも相互に刺激を与え合うような共同研究が求められているのであろう<sup>3)</sup>。そのことは、英語で発信するための「スキル」に還元できないのである。

## 注

1. 自らが豊富な史料を残すことが稀なこうした対象を分析するには、法史料を用いた〈法と社会〉の分析視角が特に有効だと考えられる。なお、〈法と社会〉の分析視角のもう一つの含意である、〈法的な枠組みと社会的な実態〉の突合せも重要である。
2. ボツマン氏の問題提起は、諸事情により今回は収録できなかった。そこでは、冒頭でジョン W. ホール氏の“Terms and Concepts in Japanese Medieval history”, *Journal of Japanese History* 9:1 (Winter 1983) の問題提起とホール氏について紹介し、その後彼を中心に行われた日米の日本中世史研究者を組織した共同研究の意義と問題点を指摘している。さらに、そこでまとめられた論文にグロッサリーが付されていることや「日本史グロッサリー・

データベース」(史料編纂所)に向けた努力がされていることなどを踏まえながら、「グロッサリーを作る価値→結果として一つの用語につけられる訳も大切だが、プロセスの方がもっと大事なのではないか(要するに他の研究者と議論し合って、言葉の意味(一点一点の史料の意味)を考えること)」(当日のレジュメ)と指摘している。その上で、これらの共同作業はこれまで中世史を中心に行われており、今後、近世史についての共同作業が求められていると指摘し、次の三点を課題として挙げている。

- A 近世の(歴史)用語の訳をもっと徹底的に考える必要がある(例えば、非人・株・奉行・仲間・町・村・役)
- B 訳語の政治性を検討する必要もあるのではないか(帝国主義の問題)
- C 近世社会史の成果を理解してもらうために、(歴史)用語だけでなく日本の歴史家によって新しく作り出されている(歴史)概念の英訳もちゃんと議論し合って、説明する必要がある(例えば、身分的周縁・重層と複合・社会的権力・分節構造)

なお、Cの指摘はホール氏を中心とする共同作業が、歴史用語に集中し、歴史概念については脇においてしまった問題点を踏まえている。

3. こうした共同研究の一例として、本文で述べた吉田伸之氏を中心とする「ぐるーぶ・とらっど3」による日仏比較都市史研究の取組みがある。これには、フランスにおいてフランス都市史を主導しているフランソワ＝ジョセフ・ルジウ氏やアラン・ティレ氏らとの共同が欠かせないが、それを可能にしたのが、フランスの研究にも明るい日本史研究者ギョーム・カレ氏と日本人のフランス都市史研究者高澤紀恵氏存在である。